

6. 韓国におけるハンサリム運動と田中正造の自然観と生命観

韓国・円光大学校教授 朴 孟洙

田中正造さんが求めていた命の問題に関して今韓国社会がどんな問題意識を持って頑張っているか、という状況についてとり上げてみたいと思います。先ほど高際先生から私になぜ、どういう経緯で田中正造さんと出会ったか少し話がありました。私は、韓国の円仏教という新宗教がありまして、その、いわゆる牧師のような身分でした。1980年代に光州事件を軍隊の中で経験して、自国民の風習、自国民のやり方にとっても腹が立ち、衝撃を受け、それから社会を変えるための社会運動を始めました。その流れの中で、私とは別に、1980年代はじめから江原道の原州という町、そこは金芝河詩人^{キム ジ ハ}が中学校高校時代を過ごした町、また韓国の民主化運動に大きな業績を成し遂げた池學淳^{チ ハクスン}主教が活躍されていた町なのですが、その原州を中心にして1980年代初め頃、「これまで政治の民主化や、社会のシステムを変えるような、社会的な運動では韓国の社会は良くなならない」と大きな問題意識を持つグループができておりました。そのグループを「原州キャンプ」と言っています。その中心的な人物の一人が、金芝河詩人でした。もう一人金芝河詩人の恩師、韓国では若者たちの思想の代父と尊敬されておりますけれども張壹淳^{チャンイルスン}という会長がいました。その張壹淳先生と金芝河詩人のグループが、1983年くらいに、政治レベルの政治の民主化のための社会運動から、文明のあり方を変えるための新しい運動を始めました。

それは、最初は『ハンサリム運動』という言葉を使いました。(資料・2-1)) 私が韓国社会を変えるために宗教から社会に足を運んだ時期に、原州では社会問題から、命を大事にする新しいグループができており、その流れの中で1987年、韓国では有名な「6月抗争」という民主化闘争が起きました。延世大学の李韓烈^{イ ハンニョル}という学生さんが催涙弾に撃たれて死んでいく、またソウル大学の朴鍾哲^{パクチョンチョル}という学生が拷問を受けて死んでいく、という流れの中で、一般市民が立ち上がって、自分の手で大統領を選ぶ、直接選挙制という新しい選挙制度を勝ち取るための闘争が起こり、それがある程度の勝利になって、選挙制度が変わりました。1987年の民主化闘争で間接的な選挙制度から直接的な選挙制度に変わりました。その時期に私もちょうど原州キャンプのみなさんと会う機会がありました。私の元々の大学の専門は東学の第2代目の崔時亨^{チェ シ ヒョン}という方の思想の研究でした。その修士論文を書いてから、「原州で東学の崔時亨を好きな、素晴らしい先生がいらっしゃる」ということを初めて聞き、原州に行き、お会いしたのが、張壹淳^{チャンイルスン}先生でした。

私が先生から、最初に言われた言葉は「全斗煥^{チョンドファン}を愛してくれ」という言葉でした。私が小さな暴力を使っても、こうしたいという気持ちで来ている私に、最初に先生

が私に贈った言葉は「全斗煥を愛してくれ」でした。この言葉に大きな衝撃を受けました。それはなかなかできないという気持ちだったのに「全斗煥を愛してくれ」という言葉を聞いて、最初はその言葉の意味が全然わかりませんでした。でも今は少し、命の世界に入ってからその「全斗煥を愛してくれ」という言葉の意味を少しだけ理解しましたが、最初は全く理解できませんでした。しかし、大きな衝撃を受けました。その時の私は、ずっと政治レベルの戦いをし続け、いろいろな事件に関わりました。私の通っている大学院でいわゆるデモを起こしたり、労働組合を作って戦ったりしました。また 1988 年は韓国でソウルオリンピックが開催予定でした。それで、これまで外交関係がなかった社会主義国家とも、国交関係が進められました。しかし北朝鮮には、全然その感じが無い。これに対して私たち、若い研究者たちは「他の社会主義国家とは違い、国境もすぐなのに、自分と同じ部族なのに何もできない。この状況はダメだ」ということで北朝鮮を正しく認識しようとする運動を起こしました。北朝鮮から日本に輸入されている、北朝鮮で刊行された本、金日成の語録をそのまま印刷されている本を、さらに日本から輸入し、そのまま写字版にして、研究者など欲しい方に配る、などそういった運動です。私が担当した内容は、33 巻の朝鮮全史でした。しかし、それで国家情報院からチェックされて、反対運動、労働組合運動、北朝鮮を正しく認識しようという運動、3 つの罪が重なって、10 年間博士論文を書かせてもらうことができませんでした。その時期に張^{チャンイルスン} 壹淳先生の所へもう一度行ったら、私にくれた 2 番目の言葉は「あなたは革命なのか。あなたは本当の意味での運動家なのか。革命家や運動家は傲慢さが必要だ。あなたにはその傲慢さがあるのか。」と言われ、きちんと聞いておりました。「自分が夢見た 100 くらいの事業が全部失敗してしまって今の段階で 1%くらいが残っていて、その 1%に希望を感じながら進んでいく、そういう姿勢を持つのが、本当の意味での運動家だ。あなたは、運動家なのか。」という言葉を言われました。それで私も、最初が「全斗煥を愛してくれ」、2 番目が「運動家の傲慢」、という 2 つの言葉を聞いていわゆる命の運動（ハンサリム運動）をなさっている方に合議しました。それが 87 年から 88 年でした。それから韓国でハンサリム運動を担っている皆さんと一緒に運動をしていますけれども、その運動が 1986 年からちょうど 30 年です。今は「ハンサリム」という言葉、また、一般の方が違和感を覚えないように変えた言葉が「生命運動」です。それはもともとハンサリム運動でした。ハンサリムは実は命の世界を韓国のハングルで表現したものなのです。『ハン』というのは、『命』の別の言葉です。だから韓国ではハンサリムと生命・命とは同じ意味を持っています。その運動がちょうど今 30 年経っておりまして、私たちが起こしたハンサリム運動は今、定着しています。資料の 1.にも、私たちのハンサリム運動・命の運動に対して説明が

されています。”命を大切なものと考え、死にかけている生命を生かそうとする社会的な運動。”今は韓国では、「ハンサリム運動」別の言葉で言えば、「生命の運動」は定着している。また生命運動の韓国社会での先駆けがハンサリムだったということが市民からも政府からも今は認められている状況です。資料 2-3) からは 80 年代から今までのハンサリム運動と一緒にあって色々な社会的レベルでの命を生かすための運動の流れに触れています。

23 ページに移ります。23 ページの真ん中なんですけれども、いまハンサリムは昨年の末には、約 40 万世帯、4 人家族で言えば 100 万以上の方がハンサリムの会員になっています。韓国では一番大きな生協、日本の生協ともかなり似ていますが、日本と違うところは、いわゆる有機農産物を消費者に直接届けるという運動だけではなくて、命を生かすような様々な活動、それを私たちは生命文化運動というような言葉を使いますが、単なる商品の取引だけではなく、命を生かすための様々な運動と一緒にしている。そういう団体がハンサリムで、昨年末には約 40 万世帯になっているというわけです。今年 9 月には国際有機農業賞という、大きな賞をもらうことになっております。実はそのハンサリムが最初から目を向けた問題が、今の私たちが共有している、生活と一緒にしている、今の文明のあり方を根本的に見直すべきだという問題意識、それがハンサリムの出発点、いわば原点でございます。

24 ページにはいます。みなさんご存知の通り、今年 4 月韓国でセウォル号の事故がありました。私の感覚では東日本大震災での福島第 1 原発事故のような事故だったと思います。全国民が見ている中で 300 人以上の特に若い高校生たちが一人も救うことができない状況の中で亡くなりました。それで今韓国社会は、「お金から命へ」という、それが CM でもやっていて、スローガンになっています。数多くの自治体の代表たちも「お金から命へ」ということを強調していますが、それに対して私たちが課題、問題意識を持ちたいと思います。

【資料 4.】今、私たちは「命を殺すような文明」、それから「命を生かすような文明」、という分かれ目に立っていると思います。その「命を殺すような文明」によって転覆されるのか、「命を生かすような文明」へと転換させるのか、それが実は韓国のハンサリムだけではなくて、みなさんと同じ、私たちが立っている大きな課題ではないかと思います。その中で 2009 年に私は偶然にも、3 人の日本の先生からほぼ同時期に、田中正造さんのことについてお話がありました。1 人目は中塚明先生、2 人目は小松裕先生、3 人目は北海道の小樽にお住まいの花崎皋平先生です。ほぼ同時期に「あなたが一生懸命やっていた東学の思想、ハンサリム思想と全く同じような問題意識を持っている日本人の思想家がいる」と言われ、私は衝撃を受けました。

それで 2009 年から田中正造のことを少しずつ勉強するようになりました。すると、私が持っている「文明の転換のための思想」、いわゆる「命を生かすような文明」の道を、実は田中正造さんは、ほぼ 120 年も前に日本でつくられたという話でした。そういうことから大きな感銘・感動を受けまして、2009 年からずっと、いろんな機会に田中正造さんについて韓国のみなさん、特にハンサリムのみなさんに紹介してきました。

小さな成果ではありますが、本をご紹介します。まず、今年の 7 月に刊行された『命の目で見える東学』。実は、私が死ぬ前に書こうとした本のタイトルでした(笑)。東学思想は戦うようなものではなくて、命を生かすような思想だったことを、「命の目で見える東学」とし、田中正造さんのことにも少し触れています。これが出版社からも評価されており、韓国で一番大きな書店「教保文庫」からも評価されておりまして、8 月 23 日に著者講演会も開かれました。その影響力は、田中正造さんのことについての内容ではないかと私は少し思っています。また日本からも、昨年 11 月に『未来共創新聞』という新しい世界・社会をつくろうとする出版社、その編集長さんが韓国までいらっしやいまして、ハンサリムについて、3 日間の研修に行き、ハンサリムの店舗を見学していきました。私は研修には 2 日間携わりましたが、新聞には、ハンサリムがどういう流れでできたか、また日本との関わりは何か、また田中正造さんとの関わりは何かということについて、日本語の文章で詳しく紹介されています。これもひとつの成果ではないかと思っております。もうひとつ、この論文は去年ここに来て、韓国に帰ってから完成したものなのですが、『全琿準と田中正造の公共的生き方』。毎年、慶尚の大きな総合大学、また全羅道の大きな私立大学の 4 つの大学が、連携して大きなシンポジウムをやっています。そこへ招かれ、この論文を発表しました。そうしたら陵南大学の人文科学研究所の 69 号にこの論文を掲載したいと言われました。やはり慶尚の先生も大きな感銘を受けたようです。それで韓国では、私の狭い視野からすると、田中正造さんの内容の部分ではないかという現象が起こっております。というのも実は、120 年前の田中正造さんが文明のあり方について触れたんです。みなさんご存知の「真の文明のあり方」。それは実は、私たち特に韓国の社会が置かれている状況と全く同じ問題意識に通じておりまして、韓国では田中正造さんの問題意識に思想が注目されております。

また最後になりますけれども、実は私の元で、夜間中学・高校の元校長でいらした大西秀尚先生が、日本から留学されておられるのですが、田中正造さんの思想と、東学を作った 1 代目の崔^{チェジュウ}濟愚の思想を比較する博士論文を今準備しています。それで昨年、私たち円光大学の大学院生と京都大学の大学院生が、円光大学において、『将来世代が創造する東アジアと観光学』というシンポジウムを開催しました。そ

のなかで大西先生が、田中正造さんのことについて詳しく触れました。そのような流れで今、韓国では幸いに私と大西先生が一緒になって田中正造さんのことを研究しております。韓国の新しい社会、いわゆる未来を担う可能性が高く、韓国で一番信頼されているハンサリムの皆さんが、田中正造さんの思想に目を向けていると、今年も大学の先生からも言われました。私は、それはとても大きな歴史的意味を持っている、重要な問題意識ではないかと思っています。

これからも、田中正造さんが夢見た「真の文明」が実現されるような社会に向けて、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思っています。ありがとうございました。